



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「社会教育を学ぶ学生のみなさんへ」：西興部村の社会教育とともに歩んで
Author(s)	鎌谷, 俊夫; Toshio KAMATA
Citation	社会教育研究, 20, 147-159
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28547
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P147-159.pdf



「社会教育を学ぶ学生のみなさんへ」

～西興部村の社会教育とともに歩んで～

鎌谷俊夫（西興部村）

2001年に西興部村で学生実習調査が行われた際に、「私の実践史」を学生の方々へお話しする機会を得た。以下にその内容を紹介させて頂きたい。

1 卒業そして西興部村へ

私は、1977（昭和52）年7月1日付けの採用なんです。正直に言いますと、それまでは、西興部村という村が道内にあるのを知らなかったのです。私は、その年の4月に、東京から北海道に戻ってきて、3カ月間就職浪人していました。そんな時に、当時の教育長から電話で「社会教育主事を採用するので試験を受けてみるか」とご案内をいただき、採用試験を受けたんです。受験者は2人だったんですね。そのようにして採用され、6月末から最初の1週間はアルバイトの身分で引継を受けました。

私は十勝の帯広の出身で、家は農業をやっていました。親が畑仕事を終えるのが遅いと、中学3年までは、牛舎に行って一人で搾乳もしていました。

十勝の空は広いんですね。ですからここに来て、なんて空が狭いんだろと言うのが第一印象なんです。そんな中で、恩師からは「まずは5年一期のつもりで頑張りなさい」と励まされ、先輩からは「見合いの話が持ち込まれるくらいまで、地域の人と親しくなるように」と言われましたね。そんなふうにして東京から送り出されました。

鈴木敏正先生を前にしてこんなこと言うのは恐縮なのですが、以前に信濃生産大学という農民の学習運動が長野県にあって、それが形を変えてその後も続いていました。北海道に戻る直前でしたが、当時、「東信地区農民学習会」が開催されるということで、「そこに行って勉強してきなさい」と恩師に言われたんです。その学習会で、吉川徹さんという、今、望月町の町長になられた公民館主事にお会いしたんです。その方が、稲や野菜の栽培技術、米の価格政策などについて、農家の方と対等に話しておられ、その様子を目の当たりにして、「北海道に戻ったら私もぜひ、農村地域で社会教育の仕事をやりたいな」と、そんな気持ちになり、今まで取り組んできました。

2 青年団との出会い

この村に就職して、まず、村民の方に自分の顔と名前を覚えてもらうのが第一優先だなどと考え

て、とにかくお酒を飲みましたね。夜こそ俺の本当の仕事だという意気込みでした。そんな中で、村の青年団と出会いました。

私の恩師は、東京農工大学の千野陽一という先生（当時）なんですけれど、その先生が信州の中野市というところで、昭和28年頃でしょうか、やはり公民館主事の仕事をしておられました。丁度、青年団の共同学習運動が下火になっていく、その入口の頃だったのでしょうか。

千野先生は、「私の大学」グループというサークルを作って、青年達と学習活動をしておられたんですね。その学習活動は、今振り返ってみると、系統学習とリーダーの養成という意義をもつものだったのでしよう。

私がこの村に来た当時、青年団は確かに活動していたのですが、行事中心という状態に見えました。網走管内には、網走地区青年団体連絡協議会というのがあって、そこで夏季大会、冬季大会というのを開催しているんですね。夏季大会はスポーツ大会で、冬季は演劇とかコーラス、弁論なんかもありましたねえ。そういう大会で優勝する、そして全国大会へ行くというのがだいたいの目標だったんです。だけど、それで良いのだろうか。やっぱり社会科学の目で地域を見て、地域のことを一緒に語れるような仲間がいないと、この村の青年活動はこのままではいかんのではないかと考えたわけです。

そこで、恩師が「私の大学」グループでやっていた系統学習とリーダーの養成ということ、この村でどうやって実践していこうかと考え始めたんです。

訓子府町の菊池一春さんという、この方は札幌西高で先生をなさっていた方なんですけど、その先生が青年と向きあいながら、自らの生き方で青年を引きつけ、相手を変わせていく。もちろん自分も変わっていくんです。そういう実践を目の当たりにして、僕にはとても出来ないなと思いましたね。それで、何を始めたかという、日本青年団新聞というのがありますね。それを当時の仲間にも広めました。最高のときは10数部広がったのかな。その新聞の読者会を月1回やったんです。その中で、興味のある記事や日本福祉大学の那須野隆一先生が書いておられるシリーズものを読み合っ、自分たちの団活動に引き寄せて考えるというようなことを始めました。

そんな取り組みの中で「ふれあい」だとか、「たまり場」だとかいう言葉が飛び交うようになっていったんです。それから当時、那須野隆一先生が『青年団論』という本をお書きになっていたんです。それを仲間でも読み合ったり、日本青年団協議会が『青年団のヴィジョンを求めて』、『活動家の手引き』という本をシリーズで出しているんですが、それを読み合ったりして、私なりにリーダー養成の取り組みをしていったんです。

そんなことをしばらくやりながら、私も青年の一人でしたが、青年の要求を実現するのが青年団じゃないかと思ひまして、時には映画をみんなで見に行こうとかいろいろありますよね。「ディスカバー西おこっぺ」と称して、日曜日に車で村内めぐりを行なったこともありました。

そんなことをしながら、やっぱり自分たちの「たまり場」が欲しいということが出てきました。

大変ラッキーなことに、管内の生田原町に、当時、那須野先生の教え子で滑川剛という社会教育主事がありました。今は長万部町でゴミの問題を担当しているのですが、那須野先生が彼を訪ねて北海道においでになる機会がありました。そして、西興部村の青年団で、那須野先生を囲む学習会を開くことになりました。みんなで車座になって先生を囲み、先生からは「私が訪ねた青年団では、必ずたまり場が出来ている」挑発されました。1年後の昭和57年だったと思いますが、中古のプレハブをもらい受け、青年団のたまり場を作りました。毎週何曜日かにそこに集まる例会日を設けたのですが、それはそう上手く回転しませんでしたね。

西興部地区の青年団がたまり場を作ったことがきっかけとなり、ここから6キロ先の上興部地区にも青年団があって、そこにもたまり場ができました。維持管理費については、電気代と水道代は教育委員会が負担し、燃料代は自分たちで出すことにしました。

那須野先生に青年団の「たまり場」が出来ましたと報告したら、昭和60年だったでしょうか、愛知県で全国青年団体活動交流会があるので、「たまり場」を作った経緯を文章に起こして発表せよということになりました。私は行けなかったのですが、今、総務課で会計係長をやってる菊川博幸君という、当時の青年団担当の社会教育主事と青年団から2名の代表が参加したんです。職員の旅費は教育委員会から出して、招待していただいた青年の旅費は、県から出していただきました。

全国の青年団の活動家の集まりの中で、西興部村の「たまり場」ができた経緯を報告しましたが、その議論をとおして「出会い」「ふれあい」というようなことを一つ覚えのように言っているけれども、その奥は深いということを理解して帰って来たようです。

「生い立ち学習」とか、「話し合い学習」ということも重視しなければいけないということでしたが、これはうまく実践できませんでしたね。それには、やはり理由があるんだと思うんですけども……。

この頃、私自身は青年担当から別の担当になりました。平成5年に新しい青年研修館が西興部市街に出来たんです。この建物も西興部カラーのオレンジ色です。これは、自分たちの研修館を新築して欲しいという要求によって実現したわけです。しかし、残念ながら、今うまく使われていませんね。

青年団を考えた時に、青年の要求を実現するのが青年団活動だということを踏まえながら、青年の要求をどのように組織し、その要求をどのように実現していくのかを考えられるリーダーの養成をどうするのか、という課題があると思うんです。今、そのところを、うまくやれていないかと思います。「知は力なり」と言いますが、やはり、学習が大事だなんて思います。

3 農業青年教育に取り組んで

私が村に赴任した当時の、昭和52、3年ごろ、「土を愛し、人を愛し、神を愛す」という三愛精

神に立った道北三愛塾という農民の学習会が名寄で開かれていて、それは夏と冬の年2回の学習会なんです、もちろん公費援助はありません。全部自費です。神を信じる者も、信じない者でも参加出来るんです。その学習会に私も参加していたんですが、やがて年2回の学習では物足りない、もっと地域の農業問題を語れる場を作ろうということで、「名寄農業問題を語る会」を新たにつくり、幸いにも、私は、その初回から世話人として参加させて頂いたのです。

この「語る会」は、当時、名寄女子短期大学（当時の大学名）におられた中嶋信先生（現在、徳島大学教授）が呼びかけられてつくられたものです。中嶋先生は、北大農学部大学院を出て来られた方で、大変優れた組織者だなと思います。

最初は一人で、月1回通っていたのですが、やがて2、3名の仲間と一緒に参加するようになりました。その仲間たちと、「地元でもこういうサークルを作りたいな」ということを話しあい、お亡くなりになったんですが、当時、北大におられた美土路達雄先生に講演会の講師として村において頂いて、講演会が終わった後、「名寄農業問題を語る会」に参加している仲間たちと「美土路先生を囲む会」を開いたんです。そのとき、「ぜひ別海の泉川地区へ行ってごらん下さい」と言われたんです。泉川では、牛のブラック・アンド・ホワイต์賞のようなことだけに目を向けているのではなく、家族経営ながらも、ときには旅行したり、また、そんなに負債を負わないで生き生きと酪農をやっているよ。ぜひ泉川の酪農青年と交流してごらんと勧められたんです。

その後、私達は泉川へ行ってショックを受けたんです。乳量は多くはないのだけれど、負債がそんなには無いことにびっくりしました。西興部村の仲間達は、父ちゃんの経営をただ引き継ぐのではなくて、少しは規模を拡大し、乳牛の品評会に牛を出すにしても上位をねらいたいと言うような気持ちの人が多くて、泉川地区の酪農青年とは違う価値観だったのです。そんな状況がありまして、結果的には「名寄農業問題を語る会」の西興部版っていうのは作れなかったんですけども、まずは井勘定でやっている経営を何とかしようと、例えば農協から組勘の伝票が届いてもどこかへ行っちゃって、行方不明になるんですよね。結果的に井勘定的に経営をやってるんだけど、そんな仲間たちを挑発しましてね、やっぱり農業簿記をちゃんとつけようじゃないかということで農業簿記学習グループを作りました。

私だけでは太刀打ち出来ないで、青年団のサークル「すきっ腹」（青年団新聞の読者会）で事務局をやっている農協勤務の女性を学習会に連れて行って、この伝票はどこに仕訳するか何てことを講師としてやってもらうんですね。そんなことをやって、だいたい終わるのが夜の11時ぐらいなんです。学習会が終わった後、その女子職員にサービスしなきゃいけないということで、みんなで隣町の下川まで車をとばして、ホルモンを食べて帰ってきたら午前1時ぐらいになっていたこともありました。しかし、楽しさがありますよね。学習というのは、楽しさの中で創り出されなきゃいけないと思いますね。

やがて、青色申告をやる仲間も出てきて、やはり、井勘定ではだめだということになってまいり

ました。一方では、良い牛を育てたいという要求があるのも事実だし、それを否定するのもおかしいなと思いましたね。それじゃあと言うことで、私より一歳先輩だったかな、日本獣医大学を出た獣医さんが、当時、村にいたんです。その獣医さんと何かやらないかということで、農文協から出ている渡辺高俊さんの「乳牛の繁殖障害」という本を、その獣医さんをチューターにして、5、6人の仲間達と読みあいました。

そんな学習会もやりましたが、残念ながらそれは1年間続かなかったです。その獣医さんが、家庭の事情で、千葉にお帰りになったんです。獣医さん不在のままでも学習会も続けたんですが、みんな、どんぐりの背比べという感じで、とんちんかんな事を言ったりで結局続きませんでしたね。学習を続けるには、やはり組織者とその道の専門家の援助が必要だなと思いました。

そんな仲間たちが中心となって、クルミ酪農研究会という農業後継者の会を作っていたんです。その会でいろんな事をやったんですが、どういう訳か、その活動が評価されて、北海道農業賞を受賞したんです。青年活動部門だったかな。そんなことも一つの励みになりました。

美土路達雄先生においでいただいた翌々年ぐらいでしたか、北大の教育学部で農業青年の「北大2日留学」というのをやったんです。12、3名が参加したと思いました。朝7時の汽車に乗り、午後1時ぐらいに札幌駅に着いて、教育学部の教授会をする会議室を2日間お借りして、美土路先生、山田定市先生、太田原先生、七戸先生といったすごい顔ぶれの先生方の講義を受けるんですよ。90分講義。最初の1、2時間は聴いているんだけど、やがて居眠り。すごい先生が講義をしてくださるのですが、起きて聴いているのは3分の1ですね。そんなことがありました。

学習したテーマというのは今でも思い出しますが、トラクター利用組合やその他の生産組合の共同化問題、あるいは、乳牛の繁殖障害についてなどです。学習内容の編成は良かったと思うんですよ。でも、それが果たして、日々汗を流して働いている仲間達にとってどうだったのか。「学習」という形での強制労働だったのかなって反省もありますね。だからこれは、学習のやり方としては失敗だったと思うんですが、いい経験になりました。

それがどんなに大事な学習の内容であっても、学ぼうという意欲を作り上げていく過程がなければ、やっぱりだめなんじゃないかという反省ですね。

出かけて行って勉強するスタイルはやめようということで、翌年から、地元で農業経営について学習する機会をつくらうということで「農業講座」をスタートさせました。その当時、周辺町村の社会教育を見ても、農業講座とか農業経営講座というのは、ほとんど開設されていなかったんですよ。農村の社会教育でありながら、社会教育も行政の縦割りの中に位置づけられるようになってきたんです。社会教育の内容が、農業・農村問題と切り離された形で展開されるようになってきた時期だったんですが、それはおかしいなと思いました。これも古典になっちゃうかもしれないのですが、宮原誠一という東大の先生が、農村の公民館で、農業問題や農業をやっている仲間達と向き合うような仕事をしないで良いものかというお叱りの言葉を、ある本の中に書いておられるの

ですが、西興部村の社会教育は農業と響き合う、ここで暮らしている仲間たちと響き合う活動をしていかなければいけないんじゃないかとそんな思いで仕事をしていました。

4 社会体育を担当して

当時、私は青年と体育担当だったんですね。私は運動が苦手で、社会体育を担当しなければならないのは困ったなあと思いました。その頃、隣町に私と同じ歳の体育担当職員が入ってきました。彼は教育大釧路校で体育を専攻した人で、卓球で国体にまで行ったようなすごい人で、そんな人が担当しているのだからとっても太刀打ち出来ないなあ、困ったなあ、と思っていたんです。そこで美土路先生が名寄短大に毛馬内常夫という体育専攻の先生がおられるから、その先生に会ってごらんとご紹介頂いたんです。

毛馬内先生と会ってお話する中で分かってきたことですが、先生は「スポーツ文化論」の立場で研究しておられるのです。学校体育研究同志会というのがあって、例えばオリンピック選手が身に付けたトップレベルのスポーツ技術を、初心者に対して、分かりやすく指導していくにはどうしたらよいか、自分の体を自分でコントロールするという身体支配能力をどのように培っていくか、そのための指導法、教授法について研究しておられる方です。

毛馬内先生とお話していると、体育担当の自分が何をやらなければいけないのか分かってくるんですね。

当時、網走管内の各市町村にも日体大卒の体育職員がどっと入ってきた時代なんですが、そんな中で、私に出来る体育の仕事ってなんだろうかなって考えて、最初に取り組み始めたのが、農家のお父さんや若妻達と、一週間に1回か2回、スポーツで汗を流す場を作ろうということでした。

その人達が出来る軽スポーツを普及しなきゃいけないんじゃないかと思い始めて、一方では、野球やソフトボール、バレーボールなどの競技スポーツをやりたい人もいるのです。それはそれで大事にしながら、また一方で、そのレベルについていけない人に対しても、野球や卓球、バレーボールなどになるべく参加できるような体育指導をする仕掛けをつくる仕事であれば、私にも出来ると思い始めました。

私自身が指導することは出来ないけども、そういうスポーツ教室を開催するとか軽スポーツを広めたらどうかということ始めたのがミニバレーボールなんです。それが今では年1回大会をやるんですが、36チームぐらい参加するのです。応援も含めると二百数十名がスポーツセンターの建物の中にいるわけですね。そこには役場の職員も農協の職員も、街の人も、農家のおじさん、おばさんも、中学生、高校生もいる、そんな感じですね。

スポーツ文化論との出会いの中で、スポーツをどう広めるか、条件整備をどうするのかということが私なりに分かってきて、仕事を進めることが出来るようになって来ました。その中で、とりわ

け地域の体育指導委員の方々にどういう仕事を担っていただければよいのかということが、私達も正直なところ分かっていませんでした。先輩から引き継いだ仕事をそのまま続けていても良いのかな、ということがずいぶんあったのですが、このスポーツ文化論を学習するなかで、体育指導員の役割ということが私なりに少し見えてきました。

その頃、雑誌『体育科教育』（大修館）に「社会体育の12カ月」というシリーズが2年間連載されました。社会体育について、現場の職員が執筆した連載だったのです。それを読んで、社会体育で何をやっていいのかわかなくなりましたが、そんな中で、体育指導委員の役割とか、「教室からサークルへ」とか、そんな路線を小さな村なのですが、方向づけることが出来ました。それから、少年団活動もその中の一つでした。

『体育科教育』に2年間連載された「社会体育の12カ月」が、その後、1冊の本にまとめられました。当時の私にとっては、バイブルのようなものなのですが、それをこの西紋市町村の体育担当職員と勉強したりしました。日体大の森川貞夫先生が編集しているんですね。

その森川先生等の動きとは別の動きなのですが、当時、筑波大にいらした糸野豊先生に学びながら、体育指導委員活動の独自のスタイルを作りあげていったのが東京の三鷹市なんです。三鷹市の体育指導委員活動をまとめたものとして、『コミュニティスポーツへの挑戦』という本があります。私は、この二冊の本によって勉強させていただきました。

その当時こんな話があるんです。体育、スポーツでも、住民みんなが体力テストをやって、それを病院のカルテのように作成し、病院で診察を受けるときに持参する。医療とスポーツを結びつけようという訳です。でも、それは何か変だなという違和感がありました。

当時、三鷹市の動きをじっと見ていると、独自のやり方で展開していたのは北見市なんです。北見市の動きというのは、当時、全国的に注目されていましたね。サンダル履きで行ける範囲の距離にスポーツの拠点を作って行こう、スポーツクラブを作ってスポーツ人口を増やしていこう、そのために、身近な所にスポーツセンターを作っていくんですね。そう言ったことをきちんとやっていたのが、当時の北見市なんです。私は、そんな北見の動きを見ながら、遠くて三鷹には行けないけれど北見なら行けるということで何度か訪問しました。

自分の村を見ていると、北見市といろいろな共通点があるんですね。網走管内で一番小さな村と一番大きな市なのですが、スポーツをする条件整備をどのように進めて行くかという「器」の問題と、スポーツの普及に欠かせない技術指導の問題、サークルを作ってそれをどう運営していくのかという問題、その3つのことがきちんとセットされていかないと、市民スポーツというのは広がらないのではないか、そんなことを思いました。青年団のリーダーづくりと同じだなあって……。

その頃、伊藤陳良さん（現社会教育課長）という方が体育指導委員をやっていました。伊藤さんも、毛馬内先生との出会いを通じてスポーツ観を変えていった方です。毛馬内先生から、新体連というスポーツ団体のことを紹介していただいて、やがてその新体連の機関紙を定期購読するように

なったんですね。伊藤さんという方は、剣道とスキー、卓球がとても上手な方で、この伊藤さんが毛馬内理論をどんどん吸収していくなですね。スキー協の指導員にもなりました。一方で、全日本スキー連盟の指導員にもなりまして、どちらの指導法や普及方法が良いのかということ、自分できちんと確認した人なんですね。そういうスポーツリーダーが、小さなこの村から出てきたというのはとても嬉しかったことです。

西紋地区のスポーツ担当職員というのは、私と年齢が同じというのがごろごろいました。その仲間達が一方で青年担当でもあって、一緒に「宿研」というサークルを作りました。これは住民のサークルではなく職員の勉強会なんですね。年2回、いろいろな所に泊ながら1泊2日で勉強会を開いていたんです。その時の助言者が毛馬内先生なんです。講師謝金は出せないで、「宿泊料だけ出させてください」という条件でお願いしました。先生は、謝金も無いのに毎回来てくださいました。先生の1時間の講義と職員からの実践発表を聞いた後、皆で実践検討しようという内容の学習会で、3年ぐらい続けました。

西興部村の青年団だけが活発になってもだめだ。みんなでもにも高まっていこうという、職員意識が芽生えた時期でしたね。

7 婦人学級を担当して

私が村に来て5年ぐらい経った頃、社会教育係長になりました。その後、菊川博幸さんという人が入ってきました。彼に青年団を引き継いでもらい、私は私で、先輩から引き継いで、婦人とか高齢者の担当になるんです。婦人学級も担当するのですが、当時、婦人学級の主事さんというのは学校の校長先生だったんです。あらかじめ主催者側で決めた内容に沿って事業をやっていくんですが、手芸だとか料理だとか、それでいいのかなという思いもあったんです。そんな中で名寄短大の先生を講師に迎えたり、これも農村婦人学級だったと思うんですが、もっと身辺問題を重視しようということでやりました。保健婦さんが来て1時間ぐらいお話して帰るんですが、帰ったあとで本音が出てくるんです。その中にも克服していかなければならない課題があるのではないかと思いますね。それで「健康の問題」を取り上げて行こうということになって。「農夫症」というのをご存じですか。長野県の佐久総合病院の若月俊一先生が『農村の医学』という本に書いておられますし、旭川厚生病院の藤井元院長先生も「農夫症」のことを書いておられるけれど、そこに書かれている内容は、西興部村の中でもずいぶん起きているということが分かってきました。もう一つは、1979年に北大教育学部産研が発行した『農業の近代化と農民の健康問題』という研究報告書で、これを読んで、私は大変ショックを受けました。農家のお母さんやお父さんの健康の問題、農作業事故など、実はこの村にもあったんですね。そこで、農家の健康問題を婦人学級で取り組むことになりました。

そのころ、信州松川町の松下拡先生の実践報告なんかもありまして、私の関心も、そちちの方へどっと向かうことになりましたね。

そういうことで、恥ずかしのだけでも、当時取り組んでいた「調査学習」という線で、北社協の『大地に根をはる社会教育』第1号に書かせて頂いたんです。

農家でありながら野菜栽培の数が少ない、自分で栽培している数が少ない。多い農家では23種類ぐらい、少ない農家は10種類に満たないんです。それには理由があるんですね。お母さんが夜遅くまで牛舎仕事をして、ようやく家に入って夕食を作る。そんな生活の毎日で、いつ野菜なんか作れるのか。当時は、酪農の規模拡大路線ですから、少しでも牧草をつくりたいんですね。野菜畑がだんだん浸食されてくるという感じがありました。そうした農家の実態が、お母さん達の口からぼろぼろ出て来るんです。そんな話をしているうちにだんだん知恵がついてきて、そのうち苗を分け合うんですね。そうして農家の野菜の種類がだんだん平均化してくるんです。そんな動きもありました。

こんな取り組みをやっている最中に、十勝で多く発生したのですが、スチールサイロが倒壊するという事故があったんです。雨の多い時期に収穫した飼料をスチールサイロいっぱいに入れて、バキッと倒れてしまうんです。そんな事故について、いち早く婦人学級で取り上げました。

健康検診も、お母さん達がお父さん達の尻をたたき形で始まりましたね。農家のお母さん達が学習して、「健康が大事だ」ということに気がついてきた。「主婦は家庭の保健婦」という言葉がありますが、家族の健康を気遣い、支える役割を担って頂いたのもお母さん達でした。

それから農業講座を始めたんですが、その講師の方のなかに旭川で女性史研究を主宰しておられる高橋三枝子さんがおられました。『北方農業』（北海道農業会議発行）という雑誌に、毎回、農家のお母さんが歩んできた半生を紹介しているんですね。その高橋さんを、ぜひ西興部にお呼びしようじゃないかということが婦人学級のなかから出てきたんです。それで、農業講座の講師としてお呼びしました。そこで出会ったお母さん方のうち、三名の方が、その後、『北方農業』の中で紹介されたんです。

高橋三枝子さんは、その『北方農業』のシリーズを1冊の本にされましたが、その本の中にも西興部村のお母さんが3人紹介されています。

8 高齢者教育を担当して

高齢者教室も担当するようになったんですが、それまで「うけたまわり学習」が中心だったんですね。それでいいのかなという思いがありました。綴ることを大事にしたいなと思って高齢者教室で文集を作ろうと思いました。文集は文集でも「私とできごと」というテーマにしようということで出した文集がこれなんです。全部手作りです。高齢者教室の中に編集委員会を作って、原稿を自

分たちで糊付けして作りました。カットや題字も全部自分たちの手製ですから、出来た時の喜びはものすごいものですね。そんなことをやりました。郷土館をつくる動きもあったのですが、自分たちの生きてきた「時間」はなんだったのかということを書き残そうということで、名寄女子短大の三上輝夫先生に講師をお願いし、「自分史」学習も取り上げたりしました。

また、美土路達雄学長先生（当時）にお願いし、高齢者教室として、短大に「一日入学」もしました。尋常高等小学校、今でいう新制中学校を出ていないおじいちゃん、おばあちゃん達が、大学の講義室で、学長先生のお話を1時間聴くわけです。学長先生は、ご自分のポケットマネーで飲み物をご馳走してくださるのです。そうすると、もうすっかり感激しちゃうんですね。大学ってこんなところかと。そんな勉強をしたり、宗教のことをきちんと勉強しようということで、牧師さんと、神主さんと、お坊さんに来てもらって、それぞれの宗教の勉強もしました。宗教は哲学だということが分かりました。

もう一つやったことは、高齢者教室の中でサークル活動をしようということで、陶芸、舞踊、ゲートボールなどを希望者を募りやってみました。高齢者が生き生きしている姿を地域につくっていくことは、大変大事なんじゃないかなって思いますね。

ゲートボールについては会場がなかったので、当初、学校のグラウンドの隅を借りてやっていたんです。「要求の実現」をするのが老人クラブじゃないだろうかと考えました。そして、高齢者教室の運営委員会でもその問題が取り上げられ、どうするかということを話し合った結果、老人クラブを通じて村へ要望しようということになり、実現したのが西興部多目的屋内運動場なんです。自分たちで要求した規模よりすごいのが出来たとびっくりしていました。

青年にしても高齢者にしても、自分たちの要求の実現ということを重視しなくてはいけないなと思いました、それが地域づくりへの参加のスタイルかなとも思います。

高齢者教室に設けた陶芸や舞踊クラブを通して、高齢者が「社会参加」するというスタイルをどのようにしてつくりかか考えていたとき、網走で工芸文化指導者研修会が開催されて、10人ぐらいで参加しました。その講師でおいでになっていた下沢土泡先生との出会いで、ショックを感じましたね。

どうということかと言いますと、本州には、万古焼き、有田焼などいろいろな焼き物があります。それらは、その土地の土をこね、焼いて、その土地の焼き物文化として発達してきたものだと思います。では、北海道には北海道の土を使った焼き物があるかという問題提起でした。「暮らしの中の焼き物」とは何かということですね。そういう観点でのお話を聞くのは、私にとって初めてだったので、もちろん村の高齢者の方々にとってもそうでした。

常呂町手芸館の絹張館長は、下沢先生のお弟子さんで、下澤先生の仰っている意味をよく理解しておられる方です。その絹張先生に、ぜひ西興部村に来て、ご指導くださいとお願いしまして、年に3回、その後ずっと来ていただいています。

絹張先生に教えていただいた視点というのは、「陶芸活動というのは、個としての楽しみの世界でやっていれば、それはそれで終わってしまうものだが、陶芸活動をととした社会参加を意識しなければだめではないか」ということでした。

陶芸サークルのなかで話し合いをして、交通安全運動にサークルとして参加し、自分達の作った箸置きをドライバーの皆さんに配ることにするとか、ふるさと創成資金を利用して村の茶室をつくったのですが、その茶室ができたことにより、「一戸一碗運動」を展開しよう、その茶碗は村の粘土を使って陶芸サークルが作ろうということにもなりました。これは絹張先生にアドバイスをいただくなかで考えたことです。

村のどの家庭にも抹茶茶碗があり、茶に親しんでいるという生活文化とゆとりのある生活をつくらうという運動なんです。その推進力になっていくのが私達陶芸サークルなのだという意識です。

村の文化活動と高齢者教室の活動をつなげる、ということを意識し始めたのはこの頃ですね。地元の粘土と木灰を原料にして、陶芸に使う釉薬を作る。地場資源の付加価値を高める、ということを意識し始めたのもこの頃です。

9 社会教育と地域づくり

昭和 59 年に村の総合計画がスタートして、この頃から「内発型の村づくり」ということが言われ、「一村一品運動」なども展開されてきました。置戸町で生産教育の取り組みが行なわれていますね。

私も、置戸町で生産教育の取り組みに学んで、社会教育が「村づくり」とどのようにかかわっていくかということを考え始めました。

そんな意識のもとで構想し、完成したのが「ふれあいセンター」です。今、「創夢館」と名称を変えましたが、木工、陶芸、図書室、老人クラブの集会室を備えた社会教育にとって初めての施設をつくったのです。私にとっては、大変嬉しかったですね。

最初は置戸町にならい、木工や茶碗を作っていたのです。上興部小学校の給食の器に木のお碗を使うことにして、そのお碗を木工サークルに作ってもらうということもありました。

やがて、留辺蘂町の伊藤英二先生に、「木おもちゃ」や生活小物などの指導をお願いすることができました。年に 3 回ぐらい来て頂いて、やがて森の美術館「木夢」が誕生するという流れになるのです。

この頃から、私自身の仕事は社会教育の行財政の仕事や木工関係の方にウェイトが移っていくことになりました。施設づくりに関連して、補助申請のための書類づくりや基本構想をつくる仕事が多くなってきたからです。木や土の「物づくり」は始まったばかりで、どうしても時間を多くかけることになり、学級や講座の仕事の方が相対的におろそかになってきました。「いかんなあ」と思

いながら、施設づくりや陶芸、木工の方に重点を置いていました。ですが、農業講座などは大事にしたいと思って開設するのですが、この頃については反省も多いです。学習内容の編成というのは、職員だけで行なってはだめなんですね。農業している人達と向かい合って、今、何が問題となっており、どんな課題があるのか、ということについてリアルに把握する。それを学習内容として編成していくという視点が大事だと思います。そこが、社会教育職員の役どころだと思います。

面白かったのは、中標津農協組合長の三友さんにおいでいただいて農業講座を開設したのですが、参加した酪農家の一部の人にはしっくりしなかったということが後で分かりました。

その人達は、大型経営を目指し、法人化の方向に目を向け始めていたのですね。そういうことで、三友組合長が提言してくださった、家族経営を軸とした「マイペース酪農」のことに違和感を感じたようです。これなどは、農家の人が、今何を考え、何を課題として感じているのかをきちんと把握していなかった職員の問題だと思っています。もちろん、三友さんの「マイペース酪農」に共感した農家の方も多数いたのは事実ですが。

この時は、社会教育職員だけではなく、できれば農業改良普及員とか、農協の職員、役場の産業課の職員等が、同じ方向に向かって連携をとれるといいなと思ったものです。

10 村の国際交流の取り組み

国際交流の動きが大きくなってきて、村でも英語指導助手を招へいしようということになりました。多くの市町村では、英語指導助手を斡旋する団体があるので、その団体をお願いして招へいするのですが、西興部村では、国際交流というのは「物と人と考え方」を交流するもので、その方向で国際交流のあり方を組み立てようと考えました。

幸い、村理事者の理解を得て、アラスカ州都のジュノー市教育委員会と友好関係を結び、ジュノー市教育委員会から派遣して頂いています。条件としては、単身ではなく、家族でおいで頂ける方としています。家族で村に住んで頂いて、普通の家族生活を過ごしていただき、町内会にも参加する。子どもがいれば、地元の学校に通学してもらおう。学校教育という限られた枠で仕事をしてもらうのではなく、社会教育でも活躍して頂いて、お国の文化や考え方などを生活をとおして紹介していただく、というのがねらいなんです。

現在も、こういう視点で来て頂いています。現在来てる方は、若い御夫婦で、お子さんが生まれるそうです。日本で産みたいということなんですね。村の人、地域の人に支えられて過ごしていただきたいと思っています。

11 おわりに

このようなことで、私自身は、平成8、9年の2年間、札幌で仕事をしていましたし、平成6、7年の2年間は、学校教育も担当する立場になったものですから、社会教育の現場に身を置くのは、残念ながら平成5年までだったんですね。あとは学校教育、社会教育に対して総括的な責任を負う立場になりましたので、社会教育に多く関わってこれなかったわけです。

こう見えても初代公民館館長なんです。行政の職員が館長をやっているのかと言われてたら、どうしようもないんですけど。

駆け足で自分の歩んできたことを申し上げると、こんなことだったんです。人を傷つけたり、あんなことしなければよかったとか、今思うと反省も多々ありますね。そんな中でつきあって来た仲間たちが、今、父親になり母親になり、私と同じ世代になって来てるものですから、その仲間たちと一緒に、これから新しい地域づくりをやって行けたらいいなと思っています。

一人の社会教育職員が、そういう関係の中で生活していくのもいいんじゃないかなと思っています。

最後までお聞きくださり、ありがとうございました。